Home Bound: Studies in East Asian Society. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, 1992, p.27.

16) 李亦園「民族誌学与社会人類学：従台湾人類学研究説到我国人類学発展的若干趨勢」(民族誌学と社会人類学 -- 台湾の人類学研究からわが国における人類学発展の若干の趨勢について)『第二回潘光旦紀念講座論文彙編』：12-13 香港中文大学 1993

17) 林耀華・陳永齢・王慶仁「呉文藻伝略」(呉文藻略伝) 中央民族学院民族研究所編『民族研究論文集』第六輯：429-441 北京：中央民族学院民族研究所 1988

18) 楊国枢・文崇一主編『社会及行為科学研究的中国化』(社会および行為科学研究の中国化) 台北：中央研究院民族学研究所専刊乙種第十号 1982

19) Freedman, Maurice, The Study of Chinese Society: Essays by Maurice Freedman, Selected and Introduced by William Skinner. Stanford: Standford University Press, 1979, p. 385.

20) 費孝通『中華民族多元一体格局』(中華民族の多元一体的構造)：1-36 北京：中央民族学院出版社 1989

「中国における人類学発展の困難と展望」に対する大陸での反響

李　建　東※

近年，人類学・民族学の学科建設および両者間の関係についての議論は，中国大陸・香港および台湾の民族学・人類学の両分野において脚光を浴び，ホットな話題となってきている[1]。大陸の民族学者や人類学者がこの議論に参加したのは，1994年10月28日，香港の人類学者喬健教授が行なった香港中文大学人類学系客員教授への就任演説がそのきっかけであった。

就任式の席上，喬健教授は「中国における人類学発展の困難と展望」(以下，「困難と展望」と略称する) と題する講演を披露された。その後，講演の内容は内部通信『中国人類学学会通訊』1995年1月第185期に掲載され，さらに『広西民族学院学報』(哲学社会科学版) 1995年第1期に正式に発表された。のちに『広西民族学院学報』に発表された際，若干の修正が加えられている[2]。

「困難と展望」が発表後，大陸の人類学・民族学界では，大きな関心と反響を呼び起こした。まず始めに『広西民族学院学報』1995年第3期に，広西民族学院民族研究所所長張有雋教授の「中国における民族学・人類学の学科地位の問題」が掲載され，喬健教授の文章に対しての論争が展開された。

1995年3月，北京における一部の民族学・人類学博士および博士学位取得予定者たちは集まり，学科発展について議論し，討論会では喬健教授の論点をめぐって集中的な議論がおこなわれた。討論会での一部の発言はのちほど「喬健先生の客員教授就任演説について」と題して中央民族大学の内部刊行物 (創刊号)『人類学記事』1995年5月20日第1期に掲載された。その後，『広西民族学院学報』はこの討論会の内容を全文発表することに決めた。中央民族大学民族学系主任である荘孔韶教授は「必要に応じて，喬先生の講演原稿を複写して仲間や学生に手渡した」という。それでは，なぜ喬健教授の講演がこれほど強い反響を呼び起こしたのか。

……

「困難と展望」が論争を起こしたのは，喬健教授がなされた中国人類学の四つの展望ではなく，主として当面する困難への分析によるものである。まさに張有雋教授の指摘のように，喬健教授が指摘された困難とは，主として中国人類学における主観的な条件からくる欠陥，人類学自身の方法不足についてであって，展望とは中国社会と文化が人類学を発展させる客観的条件を

※北京大学社会学人類学研究所

備えていることについて論じられた。「その論文の中心部分は前半であり，つまり，三つの『困難』である」。次に，喬健教授の指摘された三つの「困難」と四つの「展望」について，筆者の見解を述べておこう。

第一の困難，すなわち人類学と民族学の「南北名実之争」(中国南方と北方における人類学と民族学の名称論争）である。このような名称の混乱状態のもとで，民族学・人類学の発展にとって少なからぬ障害をもたらしていると，喬健教授は分析されたが，これに対して，中央民族学院の王建民氏は，違う見解を示している。

ここ数年，中国の人類学者・民族学者は実際上，人類学と民族学の概念の境界線をはっきりと意識していないのではなく，客観的な状況によって，両者を使い分けているのであって，「別に混乱しているわけではない」。王建民氏の見方によれば，こうした状況は「混乱」どころか，「多元的な使い方」だという。したがって，「多元的な使い方」であれば，「必ずしも悪いことではあるまい」。

民族学という名称が政府側の学科名となったのは，蔡元培先生の人望と中央研究院の社会的地位に負うところが大きいという喬健教授の結論に対して，中央民族大学の張海洋氏が，「少し偏っている」という。「当時の中国では，ヨーロッパの学術伝統に強く影響されているうえ，民族ということばに対する中国人の思い込み(当時の中国では，確かに人類よりも，民族を救うことが先決問題であった）もあった。」また，中央民族大学の潘守永氏が，いわゆる中国南方と北方における人類学と民族学の名称論争とは，主として旧中国の大学教育体制とかかわっており，学術面のリーダーによって決められるものではないと指摘している。

広西民族学院民族研究所の張有雋教授は，中国の人類学・民族学の名称混乱という喬健教授の観点に賛成している。中国の人類学はその発展段階において，確かに幾つかの「困惑」に直面している。問題は民族学・人類学の学科としての地位がまだ明確なものではないということに集中しているように思われる。」具体的に次の4点に現われている。

1) 喬健教授が指摘されたように，民族学・人類学の名称使用上にみられる混乱。

2) これも喬健教授が指摘されたように，目下の中国大陸の学術分野においては，民族学・人類学の名称確定および学科の境界線について，共通した認識に至っていない。

3) 学科間は縦割り状況にあり，互いに対立しあい，密接な連繋に欠けている。

4) 民族学・人類学の学科地位に対する国の確定が明確でないどころか，政策が矛盾した混乱状態にある。

しかしながら，中国に人類学と民族学の概念の混乱状況をもたらした原因に関する喬健教授の分析に対して，張有雋教授は異なる見解を示している……つまり，民族学が人類学に比べて影響力が強いのは，早期における人類学・民族学の不成熟性・不完備性および中国への伝来ルートにもよるものであると，分析している。

そもそも人類学・民族学という二つの学科の誕生は西方列強の早期における植民地への侵略と深くかかわっている。植民地支配の必要性から，これらの植民地支配者ははじめてヨーロッパ以外の民族に対する研究を始め，そこで人類学・民族学がその機運に応じて成立した。最初は英語圏の国で異文化研究にたずさわる者は社会人類学（イギリス），または文化人類学（アメリカ）と呼ばれ，ヨーロッパ大陸のフランス語・ドイツ語圏では民族学と呼ばれていた。第二次世界大戦後，植民地・半植民地が西方の植民支配から次々と解放され，独立するようになり，西方社会もその発展段階において，新たな問題が生じてきたため，民俗学者・人類学者たちは本土の文化・社会への研究を始めたのである。このような状況のもとで，民族学と人類学の研究内容がほぼ重なっているものの，人類学の研究範疇は民族学よりはるかに広いものと，西方の民族学・人類学者は考えている。したがって，

「民族学」を用いる伝統のあるフランス・ドイツなどのヨーロッパの国々も，次第に「人類学」を使うようになった。

中国では，民族学が人類学より強い影響を与えているというならば，「その根本的な要因は民族学と人類学の中国への伝来ルートに関連するのであって，マルクス主義とは無関係である」ということを張有雋教授は主張している。その理由は次のとおりである。
マルクス主義の本質は革命的で発展性のあるもので，人類が創造したすべての有用な科学を受け入れることが可能である。マルクス主義の学説はまさに人類学の知識の蓄積を批判的に吸収したうえで成立したものである。当然のことながら，マルクス主義は人類学のすべての知識に取って代わるものではなく，人々が自然界と社会を認識するうえの科学的な理論と方法を提供しているのである。このような意味からいうと，マルクス主義は民族学・人類学との間に矛盾や衝突が存在しないどころか，後者の学科発展を促しているともいえよう。

喬健教授が言及された三つ目の困難，すなわち現有の人類学の方法は中国社会の研究にとって物足りないという論点に対して，中央民族大学の陳長平氏は次のように批判している。各学科は長い発展過程において，次第に各自の理論と方法が形成されてきた。こうした方法は限界もあるが，独特の持ち味もある。複雑で変化しがちな現代社会を研究するにあたって，いかなる学科の方法であろうと，残念ながら，限界が免れない。人類学は社会科学のなかの一学科に過ぎないので，その方法には当然，欠陥がありうる。したがって，「人類学が他学科に取って代わって，『中国のような多元文化と悠久な歴史をもつ，極めて地域性に富む社会』を独自に研究しようとすること自体は，現実的な考え方とは言いがたい。今後の発展趨勢は，人類学が他学科に取って代わることではなく，他学科と協力しあい，互いに欠点を補いあってともに発展していくことであろう。

さらに，中国社会科学院民族学研究所の納日碧力戈博士が次のような見解を示している。喬健教授の指摘されたいわゆる「四つの困難」のなかで，とりわけ「現有の人類学の方法では中国社会を有効に研究するには物足りない」という論点は，「賛成しかねる」。それは，一つには外国の人類学理論の全貌はまだ全面的に中国大陸に紹介されていないので，それらの理論の適用性については，なんとも言えないのではないか。もう一つは，中国の民族学・人類学分野では，本土文化にもとづいてすでに多くの仕事をし，応用性のある理論モデルも生まれている。しかし，残念ながら，言葉の壁のせいで，これらのモデルは外国へ紹介されずに終わってしまう場合がほとんどである。「したがって，この意味からして，現在の人類学理論が適用するかどうかは，やはりなんとも言えない。」

中国人類学の展望については，喬健教授の指摘が非常に的を得ていると，張有雋教授は高く評価している。中国の人類学者・民族学者はより寛容な心になり，一致団結して，世界人類学・民族学の理論と方法を自分のものにすれば，中国の人類学・民族学研究を「より高いレベル」にまで高めることができよう。一方，喬健教授の展望に対して，張海洋氏は「まるで物を見て人を見ない感あり」と述べている。

ほかに，中央民族大学・中国社会科学院民族学研究所をはじめとする若手研究者たちは，喬健教授の「四つの困難」と「四つの展望」説に対して，批判の角度が異なるものの，共通点も認めている。つまり，中国の人類学・民族学の学科建設の歴史と現状に対する喬健教授の理解が足りず，もっと調査すべきではないかという点においてである。

まさに張海洋氏の指摘のとおり，「喬健教授の取り上げられた幾つかの事実からみると，大陸の状況についてあまりわかっていないようだ。」潘守永氏は，喬健教授が『転換期』にさしかかる大陸の研究者の心理をわかっていないと思う。」

荘孔韶教授は次のように指摘している。喬健教授は大陸で広い範囲での調査と聞き書きをしてから結論を出すべきである。その鳥瞰型の結論の根幹部分が弱すぎる……イデオロギーおよび大陸学者の『派閥』や学術団体間の関係については，おそらくじっくり腰を据えて調べる必要があろう。さらに，納日碧力戈博士は，「四つの困難」説は「言い過ぎではないか」という。このような状況をもたらしたのは，海外の研究者が中国国内の学術機関の評価ルートによるものである。つまり，海外の研究者がどのようなルートで中国を訪問し，受入先がどこになっているかは，大陸ではそれなりに意味が違ってきて，大事なのである。しかし，この点が国外の研究者にあまり気づかれていないようである。

いずれにしても，喬健教授にとって，「困難と展望」を発表する主な目的は，「中国人類学の行方に関心をもつすべての研究者たちは，このテーマについて真剣に考える必要があり，もっと議論を重ね，そのなかからより良い意見が生まれることであろう。」

最後に，喬健教授のことばを借りて，本文の締めくくりとしたい。「中国人類学はいま，まさに困難と機会が併存する分岐点に来ている」ため，人類学界にとって，「もっとも大事なのは誠実であり，自信をもって団結することである。」そうすれば，中国の人類学にとっての「麗しい前途は，必ずや実現できるものであろう。」

（蕭　紅燕訳）

注

1) 1993年以後，中国における民族学・人類学の学科建設に関する諸論考は以下のとおりである。
   - ＊費孝通「関於人類学在中国的発展」(中国における人類学の発展)『新亜学術集刊』1993
   - ＊李亦園「民族誌学と社会人類学--台湾の人類学研究からわが国の人類学発展における若干の趨勢について」『第二回潘光旦記念講座論文集』1993
   - ＊宋蜀華「論中国民族学研究的縦横観」(中国における民族学研究について)『第三回潘光旦記念講座論文集』1994
   - ＊彭兆栄「新時期人類学発展走向分析」(新たな時期における人類学の発展趨勢の分析)『広西民族学院学報』(哲学社会科学版) 1995年第2期
   - ＊陳国強「中国人類学史略」『広西民族学院学報』（哲学社会科学版）1995年第1期
   - ＊喬健「浪游帰来，近郷情怯，学以致用，文化咨詢」北京大学社会学人類学研究所編『人類学と民俗学通信』1994年9月第4期
   - ＊Chiao, Chien, Development of Anthropology in China and Hong Kong: A Personal and Casual Review. The Hong Kong Anthropologist 7, 1994
   - ＊Huang, Shu-min, The Limits of Anthropology in China, paper presented at the 13th International Congress of Ethnology and Anthropology Science (27th July-5th August 1993, Mexico City)

2) 張有雋「中国民族学・人類学の学科地位の問題について」注釈[1]は『広西民族学院学報』1995年第3期に掲載されている。

3) 張有雋・納日碧力戈などの諸氏の議論は，いずれも『中国人類学会通信』1995年1月第185期に掲載された喬健教授の論文にもとづいたものである。論文のなかで，喬健教授は4点に分けて，「困難」を論じた。ところが，のちに『広西民族学院学報』1995年第1期に正式に発表された際，「困難」が3点にまとめられるようになった。しかし，このような訂正は論点の理解に支障をきたすものではない。なお，本稿では，後者に依拠している。